

WG 活動報告

20. GVHD 以外の移植関連合併症

① WG メンバーリスト

氏名	所属	診療科
責任者：福田 隆浩	国立がん研究センター 中央病院	造血幹細胞移植科
中沢 洋三	信州大学医学部附属病院	小児科
小池 隆志	東海大学医学部附属病院	小児科・細胞移植科
桑原 英幸	横浜市立大学附属市民総合医療センター	血液内科
大橋 一輝	がん・感染症センター 都立駒込病院	血液内科
薬師神 公和	神戸大学医学部附属病院	腫瘍・血液内科
今橋 真弓	名古屋大学医学部附属病院	血液内科
名和 由一郎	愛媛県立中央病院がん治療センター	血液腫瘍内科
森 有紀	虎の門病院	血液内科
鬼塚 真仁	東海大学医学部附属病院	血液腫瘍内科
西田 徹也	名古屋大学医学部附属病院	血液内科
三原 英嗣	愛知医科大学病院	血液内科
林 良樹	大阪市立大学医学部附属病院	血液内科
小嶋 靖子	東邦大学医療センター大森病院	小児科学第一講座
谷口 享子	兵庫医科大学病院	血液内科
大島 久美	聖路加国際病院	血液腫瘍科
仲宗根 秀樹	自治医科大学附属さいたま医療センター	血液科
長村 登紀子	東京大学医科学研究所附属病院	内科
田野崎 隆二	国立がん研究センター 中央病院	臨床検査科
鈴木 律朗	名古屋大学医学部附属病院	造血細胞移植情報管理・生物統計学
土居崎 小夜子	名古屋大学医学部附属病院	小児科
松本 公一	名古屋第一赤十字病院	小児医療センター血液腫瘍科
鈴木 信寛	札幌医科大学附属病院	小児科
辻 正徳	虎の門病院	血液内科
藤田 直人	広島赤十字・原爆病院	小児科
加藤 元博	埼玉県立小児医療センター	血液・腫瘍科
兵 理絵	名古屋大学医学部附属病院	造血細胞移植情報管理・生物統計学
田口 潤	長崎大学病院	血液内科(原研内科)
坂口 大俊	名古屋第一赤十字病院	小児医療センター血液腫瘍科
谷口 修一	虎の門病院	血液内科
横山 洋紀	東京慈恵会医科大学附属病院	腫瘍・血液内科
石田 文宏	信州大学医学部附属病院	血液内科
前田 猛	京都大学医学部附属病院	外来化学療法部
竹中 克斗	九州大学病院	血液腫瘍内科(第一内科)
木村 文彦	防衛医科大学校	血液内科
高田 覚	済生会前橋病院	血液内科
太田 秀一	札幌北楡病院	血液内科
黒澤 彩子	国立がん研究センター中央病院	造血幹細胞移植科

② 2011 年末時点で承認された研究、及び業績一覧

「同種造血幹細胞移植後の出血性膀胱炎(HC)に対する標準的予防法・早期治療法の確立に向けた抗ウイルス薬のHC 発症抑制効果に関する検討」 PI:中沢 洋三
学会発表・論文業績:未発表・執筆中
「造血幹細胞移植後合併症と長期予後に与える HCV 既感染の影響」 PI:仲宗根 秀樹
学会発表・論文業績:Nakasone H, et al. 2012 BMT Tandem Meeting (発表予定)、Feb 1-5, 2012, San Diego, USA 仲宗根秀樹他 第 34 回日本造血細胞移植学会総会(発表予定) 平成 24 年 2 月 24 日-25 日 大阪国際会議場
「Hematopoietic Cell Transplantation Specific Comorbidity Index (HCT-CI)を用いた同種造血幹細胞移植後の予後予測に関する研究」 PI:横山 洋紀
学会発表・論文業績: 横山洋紀他 第 34 回日本造血細胞移植学会総会(発表予定) 平成 24 年 2 月 24 日-25 日 大阪国際会議場
「同種造血幹細胞移植後の微小血管症の発症割合、リスク因子、予後に関する研究」 PI:名和 由一郎
学会発表・論文業績: 名和由一郎他 第 34 回日本造血細胞移植学会総会(発表予定) 平成 24 年 2 月 24 日-25 日 大阪国際会議場
「造血幹細胞移植後ウイルス感染の造血器悪性腫瘍再発に及ぼす影響に関する研究」 PI:竹中 克斗
学会発表・論文業績:未発表・執筆中

③ 会議開催記録(2011 年 1 月-12 月)

日時	場所	会議内容
2011/1/16	都立駒込病院別館	晩期合併症と QOL-WG、GVHD-WG との合同会議を行い、各 WG 間での研究課題について検討した。
2011/7/2	名古屋第 1 赤十字病院 ロビー	各研究者の課題について検討し、今後の予定を確認した。

④ WG の今後の活動方針・抱負など

造血幹細胞移植成績向上のためには、治療関連死亡を減らすための合併症対策が重要となる。同種移植後は、GVHDと同様に、感染症や臓器障害などの合併症への対策も重要である。本 Working group では、承認された5課題の内 3 課題が学会発表される予定であり、これ以外にも 6 課題を解析準備中である。本 WG の研究課題は、いずれも本邦初の大規模な報告であり、日常臨床においても重要なエビデンスとなることが期待される。ただし現存の一元化データベースでは、欠損が多い項目が解析対象となる場合が多いため、二次調査が必要となる割合が高い。今年度は「類洞閉塞症後群(SOS)の発症割合、リスク因子、治療法、予後」に関する二次調査を申請しており、今後、SOS に対するデフィブロタイドや遺伝子組み換えトロンボモジュリンアルファ製剤を保険承認申請する際の基礎資料としたい(平成 24 年 2 月の日本造血細胞移植学会時に審査が行われる予定)。